

■東京電力に質問書を提出しました

8月12日（月）伊藤邦夫理事以下、福島原発行動隊の3名が東京電力本社を訪れ、質問書を東電の穴山梯三氏に手渡しました。

昨年9月以降、福島原発行動隊は福島第一原発の視察許可を求めて東電側と話し合いを重ねてきました。視察受け入れについて東電側はこれまで一貫して否定的な回答をしてきました。他方、事故収束作業をめぐる諸問題についての専門家による協議の場を持つことには同意し、3月13日（水）に第1回目の協議の場がもたれました。今回の訪問はその第2回目となります。



質問書の内容について東電の穴山梯三氏（右）に説明する福島原発行動隊の伊藤邦夫理事（中）と中川晋一行動隊員（左）

今回、東電に提出した質問書は、水処理・貯蔵施設の状態、汚染水・地下水問題、作業員の被ばく、多核種除去施設や冷却水循環管路、貯蔵タンクなどの巡回点検等々、現在大きな問題となっている汚染水漏れと密接に関わる諸問題をめぐるものとなっています。

この日の訪問では、原発ウォッチャーチームの中川晋一行動隊員が質問書の内容について説明し、その後十数分間、懇談しました。懇談の中で、廃炉措置のための東電の組織体制が話題にのぼり、次回の協議の際にこの問題についても説明いただけるとの確約を得ました。質問書に対する東電側からの回答は9月上旬に受け取る予定です。

■楡葉町役場を訪問しました

8月26日（月）、塩谷理事長代行と伊藤邦夫理事の2人が楡葉町役場の放射線対策課を訪問し、住宅内・外のモニタリング活動に関する覚書を交わすための話し合いを行いました。

覚書案文については基本的な合意に到り、10月1日前後に締結することとなりました。楡葉町役場はホームページを使って住民の方たちにこのことを知らせ、それとともに11月号の広報紙にも掲載して下さることとなりました。行動隊が各仮設住宅にお住まいの方たちに案内ビラを配布して依頼者を募る許可も得ました。

楡葉町は人口約7,500人の町で、町の面積の大部分が20km圏内にあり、避難指示解除準備区域に再編されていて今なお多数の方たちが避難生活を送っています。



■北東北集会のご案内

この度、岩手の行動隊員の方からのご提案により、北東北地方の方々にお集まり頂いて研修会を開催することとなりました。下記の要領で行いますので、出来るだけ多くの方々のご出席をお待ちしております。

日時：9月7日（土）11時～17時

場所：岩手県盛岡市大通一丁目1-16（岩手教育会館 五階 第六会議室 Tel：019-623-3301 内線425）

講師：塩谷亘弘理事長代行

テーマ：

1. SVCFを取り巻く状況と今年度の活動方針（15分）
2. 放射線と被ばくの易しい解説（30分）
3. 計測器の原理の易しい解説とモニタリングの基礎知識（30分）

昼食（各自持参のこと）12時15分～13時

4. SVCFのモニタリングマニュアル（10分）
5. モニタリング実習（2時間）

計測器をお持ちの方はご持参下さい。

■理事会を開催しました

このたび、7月26日に第2回、8月21日に第3回の理事会を開催し、本年度の活動方針と任務分担を再度確認しました。また今後の方向性に関して意見交換を行いました。

■事務局連絡会へのお誘い

福島原発行動隊の事務局は毎週金曜日11時から滝野川事務所で連絡会を開いています。どなたでも参加できます。どうぞお気軽においでください。

■原発ウォッチャーチームとは？

東電との協議を目に見えない形で支えているのが福島原発行動隊の「原発ウォッチャーチーム」です。

東京電力のサイトには毎日、福島第一原発の状況について膨大な資料がアップロードされています。これらの資料に加え、監督官庁、関連学会や諸委員会の文書、メディアの報道などにくまなく目を通し、情報の収集と分析を行っているのが「原発ウォッチャーチーム」です。

チームには、長年にわたり民間企業の技術管理部で技術情報の分析に従事していた方や、東芝の元原子炉設計者、飛行機的设计者など、さまざまな分野で専門的かつ幅広い知識をもって活動してきた方々が参加しています。

原発ウォッチャーの作成したデータベースや報告の一部はすでに福島原発行動隊のウェブサイトへアップされていますが、今後そのページをより充実していきます。

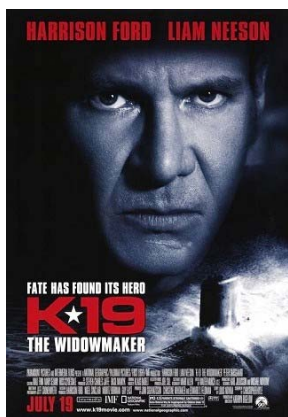
そのためにもメンバーの拡大充実を図りたいと思いますので、関心をお持ちの方の積極的な参加をお待ちしています。事務局までご連絡いただければ幸いです。

●映画「K - 19」を観て思うこと

最近『K - 19』（2002年）という映画をDVDで観た。これは旧ソ連の原子力潜水艦の艦名で、舞台はその艦内、登場人物はソ連海軍の将兵だが、キャスリン・ビグロー監督、ハリソン・フォード主演のハリウッド映画である。日本初公開は2002年12月、何度かテレビでも放映されたので、すでに観ておられる方も多いだろう。1961年、米ソ両国の核ミサイルを搭載した潜水艦が互いに相手国の近海に潜航していた時代の実話である。

就航まもないK - 19が北大西洋のNATO基地に近い海域で事故を起こした。原子炉冷却装置の破損。炉心の温度がぐんぐん上昇し、あと数時間で溶融して爆発し、核ミサイルが誤発射されるおそれもある。そうなれば熱い戦争が一触即発の状態であった冷戦下ではたちまち核兵器による報復をまねくだろう。艦と乗組員の生命のみならず、世界を戦争の惨禍から救うためにも、なんとしても事故を収束させなければならない。

原子炉担当の機関員が二人ずつ組になり、10分交替で修理に当たることになった。放射線防護服の備えはなく、防水服とガスマスクをまとった二人組はいずれも高線量下の作業で激しく汚染され、事故現場から還ったときには身体中の組織を破壊されていた。このシーンの描写は凄惨で、身の毛のよだつ思いがするが、実際にあった症状があまりにも残酷なので、映画ではそれよりも低い段階の



症状に抑えてあるという。

修理班8名の決死の行動によって最悪の事態はなんとか避けられたが、かれらはまもなく死亡した。K - 19はその後も米潜水艦との衝突事故や火災事故や原子炉事故を起こし、1991年に満身創痍で退役した。この映画の原題には“The Widowmaker”（後家づくり）という副題が付いているが、これは災難続きの同艦に水兵があたえたあだ名である。

* * * * *

こんな映画紹介文を投稿したのは、SVCF通信第40号に掲載されたお三方の発言、「死ぬ可能性がある命令に従う技術者集団」（小熊英二氏）、「廃炉作業従事者は50歳以上で」（安富歩氏）、「暴走を最後に食い止めるのは誰か」（清水敬治氏）に触発されたからです。チェルノブイリ原発事故では収束作業の初期段階で多くの消防士と兵士が死に、福島第一原発事故の直後にも所内で「決死隊」という言葉が交わされ、アメリカの政府高官は日本政府に「数百人の英雄的な犠牲」をもとめたそうです。ひとたび深刻な事故が起これば死をも覚悟した作業が必要になるのが原子炉というものです。

しかしそれを実行する人員は労働適齢期の世代、いまだ春秋に富む若者です。これはまさしく安富氏が述べておられるように「不合理かつ非人道的かつ非現実的」であり、それを正すため若者の肩代わりを申し出た老人集団が福島原発行動隊です。発足以来2年半を過ぎても本来の行動に移れない現状ではありますが、近ごろ明らかになった大量の汚染水漏れは「第二の暴発」と言っても過言ではありません。被曝した若者がばたばた斃れる映画『K - 19』を観て、私たちの存在意義をあらためて認識しました。（H・Y 行動隊員）

■読者からのお便り

●日本国民に訴えることが必要

汚染水もれなどの今更の報道に接して、SVCFにあまり熱心でなくなっていた自分を振り返りました。

ただ、これまで院内集会や海外への訴えという傾向がSVCFにあり、実は、これがある意味、私を遠ざける理由の一つでもあったのです。この機会に、国政に参加しようというような意図が感じられて、私はちょっといやだったのです。

いわゆる全国行脚というようなことが大切だと思うのです。日本人の責任であり日本人の問題なので、広く日本国民に訴えるほうがいいのではないかと思います。ひとりひとりに会うつもりで。私は、茨城県水戸市にあるキリスト教会の牧師です。私たちの教会でSVCFの説明集会をお願いしたら来ていただけるでしょうか？（茨城県 山本隆久）

●叫び続けていきたい

残暑お見舞い申し上げます。暑さよく続きますね。

大変難しい舵取りのお仕事、ご苦労さまです。

先日は大変お世話になりました。事務所の会議には一度行ってみたいと思っていましたが、活動の曲がり角の会議に参加でき、皆様のご苦労と会の現状把握が

できて大変よかったです。

帰宅してから改めて「福島原発行動隊」の本を読みました。皆様、原発は危ないと思いつつ3.11まで行動を起こさなかった事の悔いと、こうなったら次世代へ残すツケは何とか無くしたいという思いが綴られていることを改めてみて、会員の皆さんも現状にさぞ不満や無念さを持っておられるだろうなと思いました。

政府・メディア、そして国民、社会は「遠くの幸せより明日の小金」を選んでしまいました。大地震発生の確率があがっています。福一も益々手がつけられない状況になっていますが、復興は放置し、TPP、成長戦略、原発再開、オリンピックと、目先の事ばかりに血眼になっていて、日本は沈没への道をまっしぐら、これでは日本は沈みますね。先立つものが細ってきたのは残念無念ですが、黙する事は賛成を意味します。何らかの形で私たちの叫びを続ける事は出来ないでしょうかね。舵取りよろしくお願いします。

今年は猛暑続きでしたが、梨作りには幸いしたらしく、一段と甘みがつきましたと、PRしておりました。市原の梨を、一口ご笑味ください。

残暑厳しき折、ご自愛されご活躍下さい。

（千葉県 水野行雄）